

紅い花

(十三)ひと時の安らぎ

琉 紅

(十三) ひと時の安らぎ

今帰仁城内は加勢された兵で埋まり、第一の城壁の内側にまで広がっていた。それぞれの門が開かれ、戦死した双方の死体が引き取られていった。

美久の指示により、傷ついた兵士の手当ては敵味方関係なく行われた。

中山連合と本陣は数里離れた平野に後退し野営していた。敵も味方も二日間に渡る戦いで相当な数の戦死者を出した。北山軍は百数十人、連合軍は二百から三百人余りの死傷者を出していた。

賢龍は、美久の右手を驚づかみにし、彼女の動きを止めた。それは一心不乱に負傷兵の介護を行い、過労でふらつき始めている姿を見かねたからである。

「少し休むがよい。体が持たぬぞ」

「いいえ、大丈夫です。まだ手当てを必要としている兵が大勢います。私が優れた策を立てられない為に、こんなに負傷者を出してしまつた」

「自分を責めるな、さあこっちへ」

美久をその場から離し、本丸へと連れて行つた。彼女が落ちて着きを取り戻す頃には、月が真上に達していた。

月光に照らされた今帰仁城。愛を誓い合つた本丸の広場。美久と賢龍はひと時の安らぎを得ていた。

「やっと、ゆっくり話ができそうだ」

「……首里城からここで血が流れているのを、心で見たの。つらかつたわ」

「辛い思いをさせてすまぬ」

「最初は想像だと思つた。でも、違つた」

美久は遠くの中山本陣の野営の火を見ながら、辛そうにつぶやいた。

「このままでは、あの中山軍には勝てないわ」

「なぜだ。見よ、この兵の数を。中山に負けずと劣らずではないか」

「この戦、長引けば負けるわ」

空の星が眩く輝き、それらは数え切れない程だつた。

「世界はもつと、とつても広いのよ。この星の数にも負けないくらいの人々が住んでいるの。明、大和だけではなくて、もつと大地は永遠に広がっているのよ、あなたにそれを見てきて欲しいの」

美久は賢龍の胸元に入り込んだ。

「美久、もう何も言わない、この時が欲しかっただけだ」

彼も抱擁するように彼女を強く抱きしめた。

「久高島の海。その向こうにあるものを……あなたと旅して一緒にそれを確かめたかったわ」

「なにを言う、戦は我々が優勢ではないか。北山が負けたようなことを言うな、美久。戦いが終わったら、船に乗り旅に出よう」

美久は大きく左右に首を振った。

「そして彼を振りほどいて、城壁の隅にしゃがみ込む。そこは代々北山の守り神として置かれた大きな石、今では刀で裂かれ砕け散っている。その後方、城壁との隙間に手を入れ、取り出したのは白と茶色の縞模様をした子猫だった。」

「ああ、最近、生まれたようだ。よくこの辺りをうろちようしているんだ。ここは良い隠れ場になっている。守護神として祭っていた石を私は砕いたが、猫には通り安い道になり都合がいいらしい」

美久は子猫を撫でる。

「震えているわ。きつと、戦の音が怖かったのよね。もう大丈夫よ」

美久は子猫に頬ずりしながら、話を続ける。

「久高島の砂浜の様に、純白な心で全てを見て欲しいの、色の付いたこの世の出来事はすぐに理解できるはずよ……私

は、あなたの愛で、赤く染まってしまったの。純白な砂浜には戻れなかったの。それに、神人も失格よ、でもいいのよ、あなたの為なら」

子猫を抱いた美久の右肩に、賢龍は手を当て、子猫にも視線を向けると、急に力が入った。美久は肩に痛みを感じ、賢龍の顔を覗く。

「一つ、おもしろいものを見せてやろう。先週、船で運ばれてきた異国の動物で、牛ほどの大きさはある。父が好きで飼っていた。まだ数人の将兵しか知らぬ。そう言えば、昨日から戦で餌を食わずのを忘れていたな」

「えっ、何なの。見たい」

美久の目は好奇心で溢れた。

中山本陣、幕部屋に尚巴志は座している。

大君に向かって言う。

「なんじゃと、あの小娘が北山軍を指揮しているじゃと。」

だからあの時、殺しておけばよかったのじゃ」と、手に持っていた盃を地面に投げつけた。

「ははっ」

大君は横を向いた。

「軍師の裏切りは、そなたの責任でもあるぞ」

「わかっておりまする」

「だったら、何とかしろ」

「ご心配いりません。既に策は打ってあります」

「あの女もそうだが、本部平原は万全の準備をして、裏から北山に入ったそうだ。北山はあの城で勢力を増すぞ。それでも勝てるのか」

「お任せください……」

大君は頭を下げた状態で後ろに下がり、王の幕部屋から出て行った。

中山軍の最前營にて、今帰仁城を仰ぎ見た。

そして將兵を集め、攻略を考え始める。

「本部平原の兵はどれくらい城に入ったか？」

「およそ、二百。兵力は二倍になったと思われます」

大君は考えを絞り始めた。

「このまま正面からでは、あの城を落とせない。美久で士氣は最高潮であらう」

大君の口元が微笑む。

(しかし、この甘さは戦ではいらぬのに)

「北山は敵味方関係なく、負傷兵を場内に入れておる。隠密が、たやすく入りやすくなった……策士を一人、腕に傷を負わせ城に入り込ませよ」